2012年12月22日（仮）

尾澤恒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２０１２年１２月２２日（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１８９１ＢＡ

【作者名】
尾澤恒

【あらすじ】
現実にファンタジーの世界を取り入れた作品になっていく予定です。
ちょっと変わった人たちが集まって
世界を変えていこうといったファンタジーです。
いろいろなジョブを登場させようと思います
そしてちょっとした時事問題や歴史的要素も取り込もうと思います。
楽な気持で読んで頂ければ幸いです。

プロローグ

２０１２年１２月２２日　その日全てが変わった。

とあるブログにて

みなさん
今年も残りわずか
クリスマスも近いこの時期になると
彼女がほしくなりますね（笑）
これを言い続けて、早６年
ＰＣの前のあなたはどうですか？

さて、ここで話は変わりますが
明日は、今話題？の“マヤ暦”で予言されている
第４の文明が終わり
第５の文明が始まる日、だそうです。

明日は何かが起こるのでしょうか？
わくわくしますね（笑）

ヒャッホゥウ

すみません
舞い上がりました（照）

それではまた明日

☆ァディオス☆（、・ω・´）ノ

２０１２／１２／２１

俺が外の喧騒によって目が覚めたとき、すでに世界は変わり始めていた。

「なんだよ。うるさいな。」

外を見るとパトカーやら野次馬やらであふれかえっていた。これは野次馬を体験できるいい機会だ。やってみるか。

「何か、あったんですか？」

「あら、小森さん。お久しぶりね。今朝起きてごみ出ししようと外に出たらね、道路にいくつも扉があったのよ。不思議に思わない。それで警察にでんわしってわけなのよ～。それでねこの話には続きがあって、」

「へぇ～、そうなんですか。ありがとうございます。」

危ない危ない人生初の野次馬がいやな思い出になるところだった。人選ミスったな。でもさすが俺、引きこもりがちで常日ごろからあまり人とかかわっていない俺だからこそなせる技だな。うん。常人ならば、あのおばさんの長話に延々と付き合わされていただろう。

まあ、なんとなくだが何かが起こっている事は確かだろう。俺自身気になることもいくつか出てきたしな。ここは文明の利器で、俺の宝であるパソコンを使うほかないだろう。インターネットのニュースによると世界各地で同じような現象が起きているようだ。さらにはマヤの予言的中かというような見出しの記事まで出ていた。これ

はもしかすると俺のブログである“大洋のつぶやき”も何かしら反応が出ているのではないか？そう思い開いてみると、そこには見たこともない光景が広がっていた。

「ブログ炎上来たー！！こ、これが芸能人や限られた一部の人間だけが体験できるという、あれか！！！」

そこにはみんなの疑問や感情が書き殴ってあった。

それだけみんなテンパっているということなのだろう。それはそうだ。俺だってテンパっているのだから。しかし実際体験してみると一体これはどうしたものか？ふむ考えること13分俺は一つの結論を下した。

『皆さん、少し落ち着きましょう。私だって何が何やら分からない状況なんです。だから協力しませんか？我々の聖地である秋葉原に集まりましょう。今日の12時に待ってます。』

そう書き残し俺は部屋を出た。電車ちゃんと動いているかなと思いながら。

プロローグ（後書き）

はじめまして尾澤恒です
この作品？が私にとっての処女作になります
まだまだ拙くて見切り発車のような
気もいたしますが
皆様よろしくお願いいたします。

1話

着いた。秋葉原駅前だ！さすがは日本の鉄道職員だ。こんな異常事態でもちゃんと電車を動かしていることに拍手だ。　招集かけた手前もあって、1時間前に来てみたが早く着きすぎたかもしれない。だが集合場所を見ると6人の若者がいた。これはもしや、本当に集まってくれたのだろうか？

「あの、もしかしてブログを見て、きてくれたかたがたですか？」
スーツ姿の佐々木が答える。
「そうですが、あなたがあのブログの管理者さんですか？」
「はい、まあそうですけど。」
「私普段はレアヴロード社に勤めております。佐々木誠と申します。いつもあなたのブログを拝見させていただいております。今日は会えて光栄です。」
「ご丁寧にどうもありがとうございます。えーと、俺は作者の小森大洋（たいよう）と言います。早速ですがこれ以上人数もあっつまらないと思いますし、どこかに移動して何か食べながら話しましょうか。」
このメンバー唯一の紅一点、黒髪ショートでぱっちりとした目が勝ちきそうな雰囲気を醸（かも）す池田が口を開いた。
「あの、自己紹介とかはしなくていいんでしょうか。」
「大丈夫ですよ、池田さん。俺、みなさんの名前知っていますし。」
「どうして私の名前を？しかも、それってどういうことですか？」
「まあそれについてもみなさんと話したいことなんですが、とりあえず座って話せる場所を探しましょうよ。」
「わかりました。」
納得のいかない表情で池田はうなずいた。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。さて先ほどの事を疑問に思っている方がいるので、そのことについて話しましょうか。これから話すことは嘘と思うかもしれませんが、紛れもない事実です。あと、俺の分かることは正直に話しますんで、みなさんもよろしくお願いします。」

「はい。」

「分かりました。」

「いいですよ。」

「分かった。」

「ういっす。」

「・・・・・・」

「よし、じゃあはじめに俺にはみなさんの頭上にゲームのステータスが見えます。」

「えーと、本当ですか？」

「最初に言ったはずですよ、正直に言うと。つまりこんな感じです。」

池田由希（ゆき）　２０歳　空手家Ｌｖ３２　Ｈｐ１３５（ヒットポイント）　Ｓｐ１０９（スキルポイント）
佐々木誠　２８歳　会社員Ｌｖ３８　Ｈｐ１５５　Ｓｐ１２８
上沼健太（かみぬま）　１７歳　剣士Ｌｖ２２　Ｈｐ１６５　Ｓｐ９８
高山祐樹（ゆうき）　１９歳　学生Ｌｖ３８　Ｈｐ１０２　Ｓｐ１５９
松田佑磨（ゆうま）　１９歳　学生Ｌｖ１８　Ｈｐ１２４　Ｓｐ１１１
吉野元喜（もとき）　２１歳　ゲーマーＬｖ５１　Ｈｐ１１９　Ｓｐ２１９

「と、まあ。こんな感じで俺には見えるわけだ。たぶん名前も間違ってないはずだ。どうかな？」

「「「「「「・・・・・・。」」」」」」

「やっぱり信じられないかな？でもこれを納得してもらわないと、藩士が先に進まないんだが。・・・・。」

「いや、僕は理解できるよ。」

どう見てもオタクルックスの吉野が賛同する。
「ホントですか!?吉野さん。」
「もちろんだよ。小森氏。なぜなら僕にも見えているからね。」
「えっ。」
「小森氏の言うことが正しければ、僕たちには共通点があるね。」
「共通点ですか?」
「うん。じゃあ今度は僕の見えているものを教えよう。」

小森大洋　２０歳　ゲーマーＬｖ９９　Ｈｐ２０２　Ｓｐ３８８

「Ｌｖ９９かよ。パネッす。小森先輩。」
短髪・茶髪・高身長の上沼が言った。
「いや～それほどでもあるかな。実際ゲームはかなりやりこむしな。そういう上沼だって剣士なんてカッコいいじゃないか。」
「自分は剣道やってるからだと思うっす。でもこれおかしいっすね。」
「そうだな。みんなゲーマーだなんだである前に学生であり社会人であるはずなんだが。う～ん。吉野さんはどうおもう。」
「残念ながら小森氏、僕にもわからないな。」
「いや、これは。ふむ。吉野さん、小森君。それぞれみんなの特徴を表しているのではないかな?僕の場合はとても勉強して東京都の頭のいい大学に入学することができたからね。つまり、ぼくの得意分野は学業だよ。」
　ちょっと癪（しゃく）に障るが、知的な感じの高山は眼鏡をクイッと上げながら言った。
「そーか。じゃあ俺はゲームに命かけてるからゲーマーか。上沼とか池田さんはどうなるんだ。」
「自分は勉強が嫌いなんで、とりあえず剣道してるってカンジっす。」
「私は、勉強は嫌いじゃないけど、空手をずっと続けてるからかな。

」
「少し、解決してきたな。じゃあこのＬｖの差はなんだ？」
「おそらく各々が自分の好きなことにどの位重きを置いているかによって、変わるのではないか？」
「やっと納得出来た。俺は他に好きな物もないし、勉強もそれほど好きでもないから、Ｌｖも低いのか。」
うわっ初めて喋ったよ。危うくいるかいないか分からなくなるところだった。背もそれほど高くないし、太っているわけでもなく、そして髪型も突飛な感じでもない。どっからどう見ても影の薄い普通な感じの青年だな。
「そういうことになるな。ではなぜこんなことが起きているのか？ということだが、これは扉の出現が関わっているんじゃないかと思うんだが、どうだ？」
「その考えで問題ないと思いますよ。私はそこで、扉の調査に向かうことを提案いたします。」
「それはいいですね。ところで佐々木さんはスーツですけど、会社のほうは大丈夫なんですか？」
「心配には及びませんよ。私の会社は新聞を売って、利益をあげているんですが、こういった事態なので記者ではない私にまで声がかかりまして、急きょ取材に駆り出されました。困っていた私の前に現れたのがあるブログでした。そしてここに皆さんが集まるというので、お話をうかがいに来たというわけです。いやはや、皆さんの発想想像は目を見張るものがあります。よろしければ正式に取材を受けてくださいませんか？」
「あなたがここに来たのは、そういう魂胆（こんたん）がありましたか。でも受けたところで俺たちにどのような見返りがありますか？」
「人聞きの悪いことをおっしゃられますね。そうですね、見返りですか。協力していただけるなら、ここでの食事代やその他必要経費、新たな発見があった場合は私が上層部と交渉してそれに見合う報酬を用意させましょう。これでいかがですか。」

「ふむ、俺とは利害関係は一致しますね。でも本当に報酬は用意できるんですか？」
「報酬については心配しなくていいですよ。私交渉技術には定評がありますので。では他の方々のいかがですか？」
「俺は他にやる事ないんでやりますよ。」
「金もらえるんなら俺やるっす。それに今がどうなているかも気になるっすから。」
「アタシもここまで来て何もしないはちょっと嫌だな。」
「僕もその意見に賛同するよ。」
「僕はこれにはリアルＲＰＧの匂いがするからぜひ参加したいね。」
「そうですよね。吉野さん、そう思いますよね。夢にまで見てましたから、わくわくしますよね。よしっ、話は決まりましたよ。佐々木さん。」
「そのようですね。皆様ありがとうございます。それでは腹ごしらえと行きましょう。皆さん存分に召し上がってください。」
俺たちは運命の歯車はここから動き始めた。

2話

扉の前までやってきた俺たちは扉にＫＥＥＰ　ＯＵＴと黄色のテープが巻かれているのを目にした。

「まあ、これはあれだよな。触れるなっていう警察からのメッセージだよな。みんなどうする？」

「先輩、まだテープが巻かれていない扉探しましょうよ。これだけいろんなところにあるんスから、探せば出てきますって。」

「うん、そうだな。じゃあ佐々木さんはここらへの店の人に聞き込みに行って下さい。俺たちは手分けして探そう。あと、見つけた時のためにここで一度連絡先を交換しようか。」

みんなが頷いて交換完了！よしっ！池田さんのアドレスゲット！初めての女の子連絡先だ、わ～い。ごほん。

「じゃあ一旦解散。健闘を祈る。」

見つからないし連絡も来ない。かれこれ2時間近く歩いているのに全然見つからない。そんなことを考えていると妙な感じがする。今何を考えていたのだろう。2時間も歩いてるのか、ふむ妙だな。普段ならこんなに歩けば多少の疲れも感じるはずなんだが。気のせいだろうかまったく疲れた気がしない。そういえば、昨日も遅くまで起きていた割には今日は早く起きれたし、いつもある倦怠感（けんたいかん）もない。これは謎だ。疑問だ。池田さんに連絡できる口実ができた。いや違う、これは断じて違うぞ。そういうやましい気持ちがあるわけではない。ただ純粋に疑問を解決したいだけなのだ。そう思い携帯を手に取る。

ん？気がつかなかったが不在着信が入っていた。

「もしもし、小森ですけど、どうかしましたか？」

「ああ、小森さんですか。聞き込みしてたらね扉見つけましたよ。申し訳ありません。手間取ってしまって。」
俺は思わず空を見上げた。もう少し時間かかってもよかったのに。
「？　どうかしましたか？」
「いえ、なんでもないですよ。じゃあ早速集まりましょうか。」
「わかりました。他のみなさんには先に連絡してありますので、ご心配なさらずに。」
「了解です。すぐにそちらに向かいます。」

結局、連絡できなかったな。もしかして、あの男わざとやっているのだろうか？まあいい。早く集まらねば。待たせてしまって印象を悪くしてはいけない。

「すみません。遅くなりました。」
「いえ、大丈夫ですよ。アタシ達もさっき着いたとこですから。」
おぉ池田さんがかばってくれたのか？うれしい、とてもうれしい。
「ありがとう。では早速ですが、その扉はどこに？」
「この店の裏です。店主には許可を取ってありますので行きましょうか。」
「行こう。」

「これが各地で出現している扉か、普通の家にあるような扉と変わりないよう見えるんだがな。」
「ふむ、確かにそうだね小森君。しかし触れたりしてみたらどうだい。」
「あぁそうだな。よしっ触ってみるか。」
「ファイトっす。先輩。」
「頑張って小森君。あと気をつけてね。」
しゃあっ。悪くない気分だ。女の子に応援されるとここまで違うことなのか。今なら何でもできそうな気がする。いくか、扉に手を

あててみる。何も起こらない。開けてみるか。ガチャッと鍵が開く音がした。
「よしっ。開けるぞ。みんな準備はいいか。」
「うん。」
「うっす。」
「ええ。」
「問題ない。」
「「・・・・・。」」

扉を引く、その先には見慣れない風景が見える。次の瞬間その風景が目の前にあった。

「ここはどこだ？そうだ、みんないるか？」
「みんないるよ。」

そうか、ならいい。それから俺たちは少しの間放心状態あったと思う。今俺たちがいる場所は入ってきた扉と腰の位置まで丈のある草が生い茂っている、草原に立っていた。俺は今までこれほど風が気持ちがいいと思ったことはない。まるで童話の世界にでもいるかのようだ。

「さてみんな見惚れるのはこの辺にして、これからの事を考えないか。佐々木さん、これは新発見とよんでもいいんじゃないですか？」
「えっ、あぁ。そうですね。これは大発見ですよ。皆さんご協力ありがとうございます。」
「いやそれほどの事じゃないですよ。ものは相談なんですがね、報酬の件はいくら位になりそうですかね？」
「上と話してみないと分かりませんが、少なく見積もって１０万。反響によってはもっといきますね。でも情報は鮮度が命なので、私はこれからすぐに戻って記事を書こうと思います。」

「分かりました。ではまた何か分かったら連絡しますよ。」
「ほんとですか！？ありがとうございます。報酬のほうは任せてください。」
「頼みましたよ。じゃあこれから俺は探検するけど、みんなはどうする？」
「アタシも見てみようかな。」
「俺も。」
「僕は今日は遠慮させてもらうよ。また今度誘ってくれ。」
「おう、わかった。他は？」
「自分先輩にお供するっす！」
「おっ、おう。じゃあ吉野さんは？」
「僕は勿論参加するさ。面白そうだからね。」
「よし決まりだな。俺と池田さん、上沼、松田、吉野さんの5人か。こっからが本番だ。きをひきしめていこう。」
「それでは私たちはここで失礼いたします。」
「じゃあまた。今度は一緒に探検しましょう。」
「小森君、上沼君くれぐれも気をつけるんだよ。」
「ちょっと待て、俺も上沼と同じに思われてんのか。俺は筋肉バカじゃねぇぞ。」
「先輩、自分の事そんな風に思ってたんスんね。」
「きみをそこまで馬鹿だとは思ってはいないが、きみが気を抜いたらみんなが危険に晒されるんだよ。それは分かっているね。」
「驚くほど自然にスルーっすか。」
「大丈夫だよ。上沼君。頭を使わなくてもなんとかなるって。」
「いや、池田先輩それ励ましになってないっす。はぁ～」
「えっ。なんでだ？」
「だから君は抜けているんだ。さっきから君はリーダーっぽい感じを出しているじゃないか。上に立つ以上はちゃんとしろということだ。」
「そういうことか、それなら心配ないぞ、俺が気をつけなくてもみ

んな、なんとかなるだろうし。きっとうまくいくさ。」
「ふぅ、きみの楽観さ加減にはついていけないな。でも僕がさっき言ったことはちゃんと覚えておくんだ。いいね。」
「あぁ、わかったよ。それじゃあな。」
「それではみなさんお気をつけて。」
「失礼する。」

3話

ふと思い出したように小森は話し始めた。
「なあ、さっき扉を探しているときに思ったんだが、２時間も俺たち探してたのに、どういうわけか全然疲れてる気がしないんだよな～。」
「言われてみればそうだね。こんなときに高山君とかがいたら何か答えてくれたかもしれないのに。肝心な時にいないよね。」
お、おう。さらっと毒を吐くなぁ池田さん。悪意がないのが余計性質が悪いな。まあそれだけ俺たちと仲良くなったと考えればうれしいが、何か末恐ろしいな。
「そ、そうだね。でもいないもんはしょうがないし、俺の考えを聞いてくれるかな。扉が現れてから、俺はステータスが見えるようになった。このことは、２２日になるまでは考えられなかったわけだよな。」
「うん、そうだよね。」
「うん。そして俺たちは見たこともない風景の中にいるわけだ。つまり、扉が出てきたことによって、何らかの影響が俺たちにでてると考えるのは正しいはずだ。その影響の一つが体になんかしらの力を与えたんじゃないかな。俺の考え、どう思う？」
「先輩の考えすげぇっす。自分先輩が何言ってるか全く分からないっすけど、先輩が言うことなら絶対間違ってなんかいないっす。」
「そうか、まったくわからないのはどうかとは思うが、ありがとな。」
「うっす。」
「でも小森氏の案以外に考えようがないから、今はその考えが正しいと思われるよ。でもやっとＲＰＧっぽくなってきたねぇ、小森氏。」
「そうですね。吉野さん。これでモンスターとか出てきたら、いよ

いよそれらしくなるんですけどね。あ、でも女子がいるから危ないですかね。」
「む、アタシはそんなにか弱い女の子じゃないよ。なんなら小森君、組手してみる？」
「すみせんでした。自分チョーシにのってました。だから許して下さい。」
「むぅ、誠意が足りんな。ふふっ。なんてね、そんなことしないから怖がらないでね。怖がらないって
約束できるなら許してあげるよ。どうかな、できる？」
「はいっ、約束します。二度としません。だからお願いします。殴らないでください。」
今ので分かったとは思うが俺は自分の事をヘタレだと思っている。
数秒後、
「うん、いいよ。じゃあ約束。」
何ということでしょう。かわいらしい小指がこちらに向けられているではないか、ふれ合えるチャンスではないか、こんなについていることは今までなかったな、うん。これまでの俺の運のなさはこのためだったのか。俺はこの時初めて神に感謝した。
「う、うん。じゃあ約束。」
「嘘ついたら、針千本のーますっ、指切った！じゃあ約束ね。」
おぉー。長年空手をやってきたとは思えないほど、柔らかい指だった。幸せです。ふぅ～。うん、風が気持ちいいね。
「幸せな気分に浸っているところすまないが、小森氏前にネコ耳の女の子が見えないか。」
なんで、鼻息荒いんだよ。気持ち悪いな。もう少しだけでもいいからこの余韻を味あわせてくれてもいいのによ。
「そうですね。見えますけど何か？」
「何って興奮しないのかい君は？ネコ耳だよ、ネコ耳。話しかけてきてくれよ。」
「ちょっ、俺がですか？」

「そうだよ、君以外にだれがいるだよ、同志よ。」
俺にはそんな趣味はないし、都合のいい時だけ同志扱いしやがって。ったく。あまり人と関わりたくないんだけどなぁ。しょうがないか。期待の眼差しを向けてるし、って池田さんもかよっ。
「池田さんも好きなんですか？ネコ耳。」
「うん、だって可愛いじゃん。」
「池田さんも似合うと思うんですけどね。」
うん、とても似合うと思う。自分で言ってなんだが、そんな格好されたら俺もその趣味に目覚めるかもしれないな。
「アタシ！？アタシは似合わないよ、可愛くないし。まあよろしくねリーダー。」
何か最後のリーダーってのはとってつけたような気もしたが、池田さんに言われちゃあしょうがない、やるか。

「なあ、ちょっといいかな？」
ビクっ！！
まずいな、かなり怖がられているな。やっぱりここは男の俺が話しかけるよりも、池田さんが話したほうがよかったんじゃないか？それとも言葉が通じないのか？どうする俺。そうだ自己紹介をすれば安心してくれるかも、よしそうと決まれば、
「俺は小森大洋、聞きたいことがあるんだけどちょっといいかな夏澄ちゃん。」
しまった。名前知ってたら余計怖がられるっ。つい見えてたから言っちゃったよ。
「どうして私の名前を？それに耳がない。もしかして和の民の人ですか？」
「和の民？いや違うけど。えーと名前はそう、魔法とかで。見えたんだよ。」
「そうなんですか！すごいですね、魔法が使えるんですか。どこから来たんですか？なんでここに来たんですか？他にも魔法使えます

か？」
「ちょ、ちょっと待ってね。答えることが多すぎて分からないや。とりあえずどこか休める場所あるかな？」
「あ、ごめんなさい。うちの村にお客さんなんて久しぶりだったから・・・。」
「いいよ、気にしなくて。でも他にも仲間がいるから、その人たちもきみの村に一緒に連れていいてもいいかな？」
「え、はい。わかりました。じゃあ案内しますね。」
「ありがとう、夏澄ちゃん。おーい、みんなこの子の村に連れて行ってくれるって、出てこいよ。」
「うっす、やっぱ先輩流石っす。」
「グッジョブ、小森氏。」
　ふふ、その指へし折ってやろうか。
「すごいよ、小森君。やっぱり小森君に頼んで正解だったね！」
「いやぁ、それほどでもありませんよ。これ位ならいつでもやりますよ。」
「わぁ～、お仲間さんいっぱいいるんですね～。今日はお客さんがいっぱいです～。」
「？　俺たち以外にも誰か来たのか？」
「かっこいい男の方が一人来ましたよ♪その人も和の民のひとじゃなかったんですけどね。♪」
　やはりイケメンは卑怯だな。俺たちと態度が違うじゃないか、クソッ。いいなぁ。
「そうなんだ。それは置いといて、仲間を紹介するね。俺の右にいるのがにいる女の子が池田由希さん。」
「よろしくね。えーとなにちゃん？」
「夏澄です。１５歳です。お姉ちゃんかわいいですぅ。」
「そうかな！？夏澄ちゃんの方が可愛いよ。」
「じゃあ次な。左にいて背が高いのが上沼健太。」
「おう。よろしくな。夏澄。」

「お兄ちゃん、おっきいです。」
「そして最後に一番端にいるのが吉野元喜さんだよ。」
「よろしく、夏澄氏。」
「このお兄ちゃんは何か不思議な感じがします。でも、よろしくです。」
だろうね。その感覚は正しいよ、夏澄ちゃん。
「じゃあ案内してくれるかな。」
「分かりました。ついてきて下さい。」
「ちょっと待て下さいよ、俺を忘れてませんか、先輩。」
おぉ、いたのか。
「あぁ、忘れてた。じゃあちゃっちゃと自己紹介しちゃって。」
「扱いが雑すぎません？まあいいですよ。俺は松田佑磨です。よろしく。」
「よろしくお願いしま～す。」
「あれ、返事何か適当じゃね。ちょっと反応薄くね。なんかこうときめくような反応が「さて、行こうかみんな。」ってまだしゃべってる途中でしょうが。」

「えーと、村までちょっと距離があるんですけど、今日は近道していきますね。」
「近道かぁ。近いに越したことはないけど、近道すると何かあったりするのか？」
「えーとですね。いつもは使わない道なんですよ～。只・・・。」
「只？なにかな。ちゃんと覚えていなとか？」
「覚えてはいるんですけど～、大人と一緒じゃないと使っちゃいけないって言われているだけで、でも今日はお兄ちゃん達がいますから大丈夫です！」
「え？それって危険な道ってこと？じゃあ遠回りしていったほうが

いいんじゃないかな。」
「でも、さっき一人で来たお兄ちゃんと一緒の時は大丈夫だったから、それにさっきよりも人数も多いから、大丈夫ですよね？」
「さっき、言ってたカッコいい人のこと？」
「うん、そうだよ♪そのひとのことだよ～♪」
「ほぅ、じゃあその道で行くしかないな。そうだよな、みんな。」
「「「おぉー！！」」」
「いや、遠回りした方がいいんじゃない？」
「よし、決まりだ。近道しよう！」
「え？アタシの意見は？」
「時に男は曲げられないものがあるだよ。」
「はぁ～これだから男子は、どうなっても知らないよ。」
「皆の衆準備はいいかー！」
「「「おう！！！」」」

「あともう少しでつきますよ～。」
「ふっ、案外たいしたことなかったな。」
「結局何も出てこなかっただけじゃない。運が良かっただけだよ。わかってる？」
「分かってる分かってる。まあ、運も実力の内さっ。でも、もし何か出てくるとしたら、なにが来るんだ？」
「ナフィっていう小さい狼が出てきます。小さいといっても体長は１mあるので、だから子供だけだとこの道は通っちゃいけない事になっているんですよ。でも不思議ですね。さっきの人と来た時はわんさか出てきたんですけど。あ、もしかしてさっきの人がみんな退治しっちゃったのかも♪」

「ぁぁ、そうかもしれないね。でもその人の名前は分からなかったのか？」
「そうなですよ。結局教えてくれなかったんですぅ。はぁ、聞きたかったなぁ。」
「その人にも何かしら理由があったんだろうね。でも本当に出てこないなぁ。」
「やはりモンスターが出て来ないとRPGらしくなですよね～、小森氏、何か騒げば出てくるじゃないか。」
「それは絶対にだめです。さっきの人はそうやって、呼び寄せて、倒してましたけど、ホンットーに危険なんですからね。」
「ふっそれは俄然やる気が出てきたなぁ。それに、それだと前フリにしか聞こえんなぁ。よしっ出てこいナフィー。」
　耳を澄ませて、目を凝らすこと数秒、本当に出てきたと思う、そんな気配を感じる。だがこの地形は不利だな。なにせ敵の姿が見えない。まずいな、でも今はまだ数は少ないはずだ。よし、決断の時だな。
「みんな走れ、ここでは不利だ。敵が見えない、草の丈が低いところまで走って逃げろ。行け！」
「だから危険だと言ったんですよぅ。」
　まあ、やってしまったんだから、仕方ないじゃないか。さて俺は考えなければ、まず何をすればいいんだ？隊列を整えたほうがいいか。それなら
「夏澄ちゃん、池田さん、松田で前方をカバー、松田は女子二人を守れよ。」
「こういうときは、俺の存在覚えてるんですね。わかりました。やってやりますよ。」
「俺と吉野さんはステータスの確認ができるから中央で指示、吉野さんは前をお任せします。そして、殿（しんがり）は上沼、お前に任せる。頼むぞ。」
「了解した。」

「自分やるっす。見てて下さいよ。」
「では各自隊列を整えつつ走れ！」
隊列はよし。次は、うん？夏澄ちゃんの体力の消耗が激しいな。少しペースを落とす必要があるな。
「ちょっとスピードを落とせ、夏澄ちゃん大丈夫か？」
「い、いえ大丈夫ですよ。ハッ、ハァ、ハァ、それに急がないと追いつかれちゃいますし。このままのペースで大丈夫です。」
「いや、案内役である夏澄ちゃんに倒れられたら元も子もない、スピードは落とす。みんな、一戦交える覚悟はしとけよ。それとゴメン池田さん。言うこと聞いていれば、こんな目には合わなかったのに。」
「もうこうなっちゃったんだから気にしない！」
「は、はい。」
「だから次の指示お願いね、小森君。」
「わかりました。少し考える時間をください。」
どうする、どうする。もう戦うのは避けられない。なら少しでも有利な状況にもっていかないと。まだ背の低い草原までは距離がある。敵の攻撃を一方からに出来るような、大きな岩や、木、川もない。っということは、それらを背にして戦うことはできないということ。だが見方を変えればそういった障害物もないから、逃げ続けることもできるな。なら考えられるのは、単純だがこれしかないな。
「円形の陣を作る中心には女子の二人を、外側を男で固める。移動しろ！」
「待って、小森君は中心にいたほうが指示しやすいんじゃない？だからアタシは外側でいいわ。」
「待てよ、それだと池田さんが危ないじゃないか。やはり俺たちが外側を固める。」
「いまアタシを女の子扱いしなくていいわ。それに小森君よりアタシの方が武術の心得はあるから、心配しなくていいよ。」
グサッと来るなぁ。それはそれで男としてのメンツがたたないん

だよなぁ。
「ダメだ。。それは認められないやっぱり池田さんは内側に。」
「今は男だ女だ言ってる場合じゃないって言ってるの。戦える人が前に出てそうじゃない人は下がってて。」
「ウッ、でも・・。わ、分かったよ。そこまで言うんなら、約束してくれ、本当に危なくなったら下がってくれ、お願いだから。」
少しの間ふたりはにらみ合い、目を閉じ顔をそむけながら池田は言った。
「分かったわ。」
「よし。じゃあみんな移動してくれ。それと夏澄ちゃん、何か武器になりそうなものを持ってないか？」
「えーと。あ、持ってます。ハァッ、ハァ、花摘み用のちっちゃなナイフでよければ。」
「いいね。それを上沼に渡してくれるか。」
「わ、分かりました。」
「自分途中で木の棒を拾ったんで大丈夫っす。先輩使ってくださいっす。」
「いや、でもなぁ俺が使ってもなぁ。」
「なら僕に貸してくれないか小森氏。前に忍者をネットで調べたら小刀の使い方が載っていてね。これなら僕も使えるんじゃないかと思ってね、どうだろうか？」
「分かりました。じゃあ吉野さんがこれ使ってください。チッ、ナフィがだいぶ近づいてきたな。みんな構えろ！」
草むらにはナフィが6頭くらいいるかな。俺はリーダーとしての役割を果たさなければ
「みんな村まで突っ切ればいいんだ。無理に倒す必要はない。気をつけていけっ！」
そしてその言葉を最後に5人の若者の初陣が始まった。
「ハァッ！」

気合とともに上沼は木刀を振り下ろす、狼の額に当たる。続けて二撃目を下から顎を狙って振り上げる。そこにはただ力いっぱい叩きつけるだけで、技術も何も関係ない。あるのは力のみ。
「シネッ、この狼がっ！」
そこに2頭目が上沼に襲いかかる。寸でのところで気づきかわすが少し遅かった。手の甲から血が滴鯉落ちる。心なしか狼たちが血を見て興奮しているようだ。
「ツッ、クソがっ。」
そこに声がかかる。
「上沼、周りをよく見ろ、一人で戦うなっ。他のやつらと協力して戦え。」
「うっす！」
「敵は一人じゃないんだ、みんなっ気をつけろ。」
周りをよく見ろか、うん？吉野先輩いつから俺のそばにいたんだ
「上沼氏、落ち着いて聞くんだ。少しナフィ達の気を引きつけておいてくれるか。その隙に僕が奴らを仕留める。」
敵と距離をとりながら答える。
「了解っす。でもそんなことできるんスか？」
「もちろんだよ。きみがどれくらい引きつけられるかにもよるが、僕はこの中で唯一刃物を持っているんだ。それくらいできて当然だよ。」
「うっす。じゃあやるっすよ。」
「オラァッ、まとめてかかってこいやぁ！」
大きく振りまわして当てて気をそらし、かわし続ける。そして後ろに回った吉野は背中にナイフを突き立てる。狼の悲鳴が響く。やがてその声は小さくなり倒れた。
「しゃあっ」
「油断するな上沼っ。左前のナフィが弱ってるそっちを狙えっ。」
「ういっす。」
「次も頼むよ、上沼氏。」

後ろからは小森から小石での援護があり、初撃はのど狙いの突きだ。
「突きっ！」
だいふＨｐも少なくっていたおかげもあり、一撃で倒すことができた。だがそこで不幸に見舞われた。木の棒が折れてしまったのだ。
「やべぇな。」
「下がれ、上沼っ。もうあと残り2頭だ。あとは休んでていい。」
「えっ？もうそんな少しっすか？」
「そうだ。だからもういい。」
「うっす。」
「後は見てると良い、うちの勝利の女神を。」

池田は戦いを楽しみ始めていた。それもそのはず、初の寸止めなしの実践。武術家としてその才能を存分に発揮していた。
「はっ、やっ！」
飛びかかってくる狼をステップでかわし、着地の瞬間を狙い当てる。これを繰り返すことで、徐々にＨｐを削る。それに伴い戦いの中で池田の体術はより洗練されていく。より確実に当てるため、より少ない手数で相手を倒すため。隙を作り、隙を突く。そこにはある種の美しさがあった。
「はっ！」
渾身の力を込めた正拳突きは敵の右の腹部をとらえ、最後の1頭も動かなくなった。

「ふぅ、終わったかな？」
「うん、全員無事とまではいかないけど、なんとか終わったね。それにしても池田さんすごかったね。一人で4頭位引きつけるだけじゃなくて、うち2頭倒しちゃうんだからね。」
「そんなことないよ、小森君が後ろから投げていてくれたからだよ。

だいぶやりやすかったし。」
「いや、それでもすごいよ。やっぱり前に出てもらったのは正解だったね。」
「もぅ、おだてても何も出ないよぅ。それよりも手がナフィの匂いで臭いから、すぐに洗いたいかな。」
「皆さんお疲れ様でしたぁ。すごかったです。じゃあ村に向かいましょ〜。」
「そうだな、急いでここを離れないと。みんな疲れているだろうが、あともう少し頑張ろう。」
「「「「おぉ〜。」」」」

3話（後書き）

初の戦闘シーンでしたが、伝わっているでしょうか？物足りない点はアドバイスをいただけると、うれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1891ba/

2012年12月22日（仮）

2012年1月6日19時50分発行